

第26回西日本事例発表オンライン研修会 発表概要シート

法人名	スミリンケアライフ株式会社	施設名	ドマーニ神戸
発表タイトル	有料老人ホーム入居者を対象にしたライフレビュー法による QOL への影響		
研究の目的	本研究は施設入居中の高齢者を対象にライフレビューを用いて生活史聴取を行い、生活習慣から現在の生活がより良くなるヒントを探り出し、生きがいを持って生活を送れるように日々のケアから見直しを行うことで QOL 影響を検証することを目的とする。		
発表の概要	施設で暮らす上で、充実し満足のいく生活を送る為には、その方がどのように生きてきたのか、その生活史を知り、何を大切に生きてきたのかを知る機会が必要であり、介護介入を高齢者に実施し、その効果を明らかにすることは意義があると考えます。生活の場である有料老人ホームなどの介護施設では、高齢者にじっくり関わり、その人に必要な生活支援の方法を見だし、個別的なケアを実践することが重要である。 今回着目した回想法の一つであるライフレビュー法には人生への自信と効力を向上させ ADL の改善や外出を促す効果があると言われている。河合千恵子らの虚弱高齢者を対象にした心理的 QOL 向上のためのライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムを参考とし、対象者の精神面にどのような影響があるかを検証した。		
研究方法	認知症や生命にかかわる重大な疾患がなく、個別のコミュニケーションが可能な高齢者1名を対象に、週に1度、連続して6回、30分程度個別に面接を行う。 ①プロフィール②子供のころ③青年期④成人期⑤高齢期⑥まとめ ①では基本的属性や経歴を尋ねる ②～⑥まではライフレビューガイドの中から面接者が適宜項目を選び質問した。心理的 QOL に関する指標として精神的健康、ネガティブ気分、自尊感情、統合性について測定。WHO-5精神的健康状態表と生活満足度尺度 K(LSIK)を用いた。プログラム開始2週間前からプログラム開始までを実施前とし、プログラム開始当日、2週間後、8週間後を実施後とした計4回実施した。その他、面接後に対象者へ感想を聴取し、質的評価を用いた。		
成果・結果	精神的健康状態表→合計得点 2週間前が16点、当日13点、2週間後14点、8週間後が20点 生活満足度尺度→合計得点 2週間前が7点、当日6点、2週間後7点、8週間後が9点 どちらも最終的に得点が増える結果となった。 質的評価では、インタビューを重ねて行っていく中で、細かくエピソードを話される時期とあまり話されない時期と分かれる結果となった。何か思い出したことがあるかという質問に対して、初回の面接後では「特別何にもないね」と言われたただけであったが、回を重ねるごとに「思い出すも何も、その辺走り回っていただけやから」、「特別何にもないね」の他に、住んでいた場所やその時期のエピソードが聞かれた。最後の面接後では「何の取り留めのない話ばかりでごめんなさいね。ありがとう」と発言があった。 特に幼少期から青年期にかけては鮮明に覚えているエピソードも多く笑顔であり、反対に成人期から高齢期に移行するにあたって徐々に詳細なエピソードは無くなっていった。最近の事になるほど記憶が曖昧であったが、家族についての質問に対しては細かくエピソードを話されることが多かった。		
考察	精神的健康状態表については、ライフレビュー法を個別に実施し、幼少期から現在までを回想することで、人生の評価と洞察が促進され心理的効果を導き出す結果となったと考える。 生活満足度尺度では、プログラムを通して当時のエピソードを聞き出すことにより、年齢を重ねる毎に増える自分の役割を思い出し、過去を振り返ることができたことにより、これまでの生活史に満足できたと考える。 ライフレビュー法については、ライフレビュー法を用いてインタビューを進める中で、鮮明に覚えている時期とあまり覚えていない時期に分かれる結果となった。ライフストーリーにおける各人生時期の語りの密度には濃淡があり、対象者は高齢期に近づく程、記憶が曖昧になっており、最近のことを記憶することが困難な状況下にある。しかし、幼少期～成人期までの記憶は鮮明で、覚えているエピソード		

	ソードも多い。家族構成、住んでいた環境、人間関係など当時の様子を細やかに語ることができた。このことから、対象者にとって幼少期～成人期にかけての生活史は現在の対象者の人格形成、ライフスタイルにおいて重要な意味のある時期であったと考える。それはインタビュー中のいきいきとした表情や口調からも読み取ることができた。
アピールポイント 伝えたいこと	ADL や既往歴など現在必要な情報は入手しやすくなっているが、入居前の生活歴などは情報を得る為には長い時間を要する。今回のライフレビュー法を用いたインタビューはそれにあたるが、業務内容や人員配置から、業務内で時間を掛けて話を継続的に聞くことは困難な現状である。また受け持つ時にはすでに入居者が自身のことを語れない状況に陥っているケースも考えられる。様々な情報を得て積み重ねていくことで、入居から終末期まで、その入居者の特性に合わせたケアが行えるのではないかと考える。また入居者、その家族の満足度に繋がるのではないかと考える。入居者一人ひとりがより輝ける為にはどうしたら良いか、ケアスタッフとして今後も考えていきたい。